相田小学校における東井義雄の授業実践
ー着任から『村を育てる学力』出版までー

豊田 ひさき

要　　約

東井義雄は、1947 年 4 月 30 日に、母校相田小学校に着任する。新しい学校教育法に基づき、なぜ同年 4 月 1 日の発令でなかったのか。その原因は、教員適格審査で適格の判定が遅れたためと考えてほぼ間違いない。『村を育てる学力』の出版を強力に推した人物に、兵庫県の西村鉄治と京都府の佐古田好一がいたことを明らかにした。この二人が東井に出版を勧めた裏には、東井が初期編集長を務めた学校文集『土生が丘』の刊行がある。なお、この文集は、1954 年 7 月～ 1960 年 6 月までの通巻 60 号ではなく 1961 年 3 月の通巻 66 号まで刊行されていたことを新たに発見した。

キーワード

東井義雄　　生活綴方　　土生が丘　　教員適格審査　　内発的発展

はじめに

東井義雄（1912 ～ 1991）は、新しい学校教育法に基づき 1947 年 4 月 30 日付で相田小学校に着任する。東井の人事発令が、新しい学校教育法が施行された 4 月 1 日でなく、なぜ 4 月 30 日付けなのか。これは、GHQ 指示「公職追放（ホワイトパージ）」の一環として為された「教員適格審査」に関係しているのではないか、という仮説を可能な限り証拠付ける資料を挙げながら検討していくことが本論稿の第一の課題である。

もう一つの課題は、『村を育てる学力』の「あとがき」で、「戦争中に出した『学童の臣民感覚』で、ものを書くということがどんなに責任のあることかということを、思い知らされた（中略）よほどのことがなければ、書くまいと思い、自戒し続けてきた」東井が、同書出版に至るまでの間に、出版を強力に推した人物がいるはず。それは誰か、そしてその人はなぜ出版を勧めたのか、を可能な限り究明することである。

第 1 章　教員適格審査

東井義雄記念館初代館長宇治田透玄（東井の長女の夫）が、2001 年『東井義雄教育の原点』（423）に「『土生が丘』前後の歩み」という貴重な論考を寄せている。そこに、以下の記述がある（下線—引用者）。

○昭和 22 年 4 月 1 日学校教育法に依り合橋村立唐川小学校教諭に補せられる。
○昭和 22 年 4 月 30 日合橋村立相田小学校教諭を命ぜられる。

唐川小学校は、彼が戦時中の 1944 年からの勤務校。相田小学校は、彼の母校。同

じ村内の小学校でありながら、なぜ一方は「補せられる」で、他方は、「命ぜられる」なのか。この点について、宇治田は「どんな理由があったのか」としか記していない。だが東井本人は、これに関して『東井義雄著作集　1』の「解題」(289) で次のように述べている（東井、1972a、下線—引用者)。

> 教員適格審査委員会の審査を待つまでもなく、私は積極的な戦争協力者であるから、進んで職を退くべきであると考え、庭に記念の「やぶこでまり」の木を植えた。(中略) / 他の人たちの審査が終わり、「適格」という判定が通知されてきても、私には音沙汰がなかった。当然のことであると思った。が、とうとう私にも「適格」の判定が通知されてきた。意外であった。あとでわかったことであるが、私などの考えも及ばないような多くの人々が、みな、一様に、「適格」の判定に持ち込むために有利な証言をし、尽力し、奔走してくれたということであった。それが分かってみると、もう後へは退けなかった。それらの人々の行為に報いるためにも、出直す以外ないと思った。栄達も名誉もみんなすてて、村の子どものしあわせのために生涯を捧げようと思った。

ここから、唐川小学校は「補す」、相田小学校は「命ず」とされた理由が、この教員適格審査に関係していたことが分かる。4 月 1 日の「補す」の時点では、まだ「適格」の判定が下りず表向きは「保留」の状態であった。引用下線からも明らかなように、東井は、「不適格」を「当然」と覚悟していたのである。

さて、教員適格審査とはいかなるものか。遡って検討してみよう。それは、「昭和 21 (1946) 年 5 月 7 日、昭和 20 年勅令第 542 号「ポツダム」宣言ノ受託ニ伴ヒ発スル命令ニ関ル件ニ基ク教職員ノ除去就業禁止及復職等ノ件（勅令第 263 号）の第一条又は第二条の規定に基づいて、教職不適格者として指定を受けるべきものの範囲は、別表第一又は別表第二による。但し別表第一による指定は、別に定めるところの審査会の審査判定に従ってこれを行ふ。」に基づいて設けられた委員会である。別表第一を、次ページに挙げておく（下線—引用者、教員適格審査に関しては、『戦後日本教育史料集成　第一巻』、442 ～ 457 参照—以下同じ)。

兵庫県の場合、この審査委員会は、

教員代表：田岡新 (神戸市神戸国民学校長)、石原力（武庫郡御影第一国民学校教頭)、植永順次（神戸市平野国民学校教頭)、豊田和子（西宮市芦屋国民学校訓導)、久村英夫（神戸市長田青年学校長)、亀井万三郎（兵庫県立第一神戸中学校教頭)、朝野アウ（私立松陰高等女学校教諭)。

各界代表：岡部又蔵 (神戸商工会議所理事)、辻本武兵衛（兵庫県農業会役員　後、中田定治)、鈴木浩二（キリスト教会牧師)、島田竜逸（祥福寺住職)、奥儀光（神戸電鉄勤務)、西牧ユキノ（兵庫県婦人会役員)。

の 13 名で構成された（『兵庫県教育史』、728)。

審査委員会は、1946（昭和 21）年 8 月 19 日から開始され、翌 47 年 3 月まで県下 2 万人の全教員の審査がなされた。なお、「教

［別表第一］

教職不適格者として、審査委員会の判定に従って指定を受けるべきものの範囲は、次のやうである。
一　講義、講演、著述、論文等言論その他の行動によって、左の各号の一つに当たる者。
　1　侵略主義あるひは好戦的国家主義を鼓吹し、又はその宣伝に積極的に協力した者及び学説を以て大東亜政策、東亜新秩序その他これに類似した政策や、満州事変、支那事変又は今次の戦争に、理念的基礎を与えた者。
　2　独裁主義又はナチ的あるひはファシスト的全体主義を鼓吹した者。
　3　人種的理由によって、他人を迫害し、又は排斥した者。
　4　民族的優越感を鼓吹する目的で、神道思想を宣伝した者。
　5　自由主義、反軍国主義等の思想を持つ者、又は何れかの宗教を信ずる者を、その思想又は宗教を理由として迫害し又は排斥した者。
　6　右の何れにも当たらないが、軍国主義、あるひは極端な国家主義を鼓吹した者、又はそのような傾向に迎合して、教育者としての思想的節操を欠くに至った者。
二　ナチ政権あるひはファシスト政権又はその機関の顧問、嘱託その他これと特別の関係を持ちその政策を行ふことに協力した者。
三　連合国軍の日本占領の目的と政策に反対の意見を公表し、又は右の目的と政策に反対させるために他人を指導した者。
四　公官吏であって、その職務を行ふにあたり宗教を迫害し、又は弾圧した者。
五　軍国主義的又は極端な国家主義的意図をもって、教科用図書又は教育に関する刊行物の編纂に当たった者。
六　昭和三年一月一日以降において、日本軍によって占領された連合国の領土内で日本軍の庇護の下に、学術上の探検あるひは発掘事業を指揮し又はこれに参加した者。

職員の適格審査について、審査委員会に於る審査は公表しない」という指示が、1946（昭和21）年7月23日付で国の適格審査室長から出されている。この縛りのため、審査会の詳しい審議過程はほとんど不明である。

少し横道にそれるが、長野県の審査委員であった森本弥三八が1977年に『戦後教育の出発　長野県教員適格審査委員会の記録』を出している（出版時、信州大学名誉教授）。なお、森本は、1906年生まれで広島文理科大学卒業、広島高等師範学校教授を経て、1944年から長野工業専門学校（信州大学工学部の前身）教授で、審査委員会には同教授の肩書で参加している。同書には、県適格審査会に対して多数の投書があった、と記されている。また、小林洋文が森本の書に基づきながら「敗戦直後の長野県における教員適格審査：軍国主義者の教職追放」（『長野県短期大学紀要』36号、1981）を書いている。

先述したように東井が「私などの考えも及ばないような多くの人々が、みな、一様に、「適格」の判定に持ち込むために有利な証言をし、尽力し、奔走してくれた」ということの中にこの「投書」類も含まれていたものと思われる。そして後述する相田小学校長野村勝治も投書した一人であり、さらに彼は知事にもこの種の投書をしたのではないか、と筆者は密かに推測している。

兵庫県の場合は、『兵庫県教育史』（723～724）によると（下線—引用者）、

> さて審査が進むにしたがって、委員会の空気は（「不適」を多く出せという外圧で）しだいに重苦しいものとなった。そして（昭和22年—引用者）3月ともなると、いよいよ大詰めとなって、いわゆる大

物ばかりが［非審査者表］に名を連ねていた。こうなると審査は一日に5名とはかどらなかった。各委員論議を尽くしてもなお決せず、規定にしたがって評決が行われる。「適」「不適」の差が少ないと、委員長は慎重を期して「保留」を宣する。また次回に新しい資料があって好転したり、考え方が変化して、もう一度審議のやりなおし（中略）このようなことがたびたびつづき、昭和22年3月半ばの某日、ついに18名が「不適格」と判定されたのである。/しかしこの18名中、7名は中央教員適格審査会の判定や「原審さしもどし」による県委員会の再審査で取り消しとなり、結局県下で11名が教職を去るべく決定づけられた（中略）不適格の理由となった主なものは著書によるもの6、論文などによるもの4、その他1で、著書にせよ、論文にせよ、活字として残されたものは、動かしがたい証拠となった。という状況であった。

「昭和22（1947）年3月半ばの某日」とあるのは、先の「審査委員会に於ける審査は公表しない」という縛りのため。また、「不適格の理由となった主なものは著書によるもの（中略）著書にせよ、論文にせよ、活字として残されたものは、動かしがたい証拠となった。」という文言からも明らかなように、東井の『学童の臣民感覚』(1944)は、別表第一の［一の1］に当たる「動かしがたい証拠」であるはず。先の「昭和22年3月半ばの某日」は、東井が「他の人たちの審査が終わり「適格」という判定が通知されてきても、私には音沙汰がなかった。」という時期と考えてよい。つまり「18名が『不適格』と判定され（たが）」、「審査は公表しない」という縛りのため内部「保留」とされていた時である。

もう一つ、ここで明らかになったことは、先述したように「18名中7名は中央教員適格審査会の判定や『原審さしもどし』」によって「取り消し」となったという事実である。おそらく、東井の場合、知事によって中央教員適格審査会へ上申され、「取り消し」となったものと考えて間違いなかろう。審査結果を公表しない時点＝知事への内申で、7名の「不適格」を知り得る立場にあるのは知事だけ。内申を受けた知事が、「第一審の判定について文部次官又は地方長官が不当と認めた時には、再審査を請求できる。」（下線—引用者）という「但し書き」を活用して、中央教員適格審査会に上伸した、と判断したい。著書を書いたという「動かしがたい証拠」を否定して、「適格」にするには国レベルでかなり大きな力が働いた、とみて間違いない。それだけ、合橋村の唐川小学校や相田小学校はもちろん、県教育界全体で、さらには日本全体で東井が必要とされていた証拠といえる。

最初の問題に戻れば、唐川小学校は4月1日付で引き続き同校に勤めてほしいと願がったが、まだ書類上は「保留」であったがゆえに、教育委員会は「教諭に補す」という辞令しか出せなかった。以前から相田小学校にぜひ来てほしいと狙っていたであろう野村勝治校長は、4月中旬以降「不適格」が「取り消され」たことをいち早く知り、少々強引に「4月30日付で相田小学校教諭に命ず」という人事をするために動いた、と筆者は推定している。野村校長が

かように強引な人事をしたのではと筆者が推定する理由については、章を改めて検討したい。

東井に対して「適格」の判定が下された時期について、本論稿を書き進めている段階で、一つ面倒な問題が生じてきた。それは、2022年4月から筆者らが取り組んでいる宇治田家から出てきた東井関係の資料段ボール10箱を一通り調査し終わった本年10月の時点で、宇治田本人が東井に「適格」の報があったのは、昭和21（1946）年10月7日、と断定している論文を再発見したからである。この指摘は、宇治田(1998)「情熱の教育者　東井義雄」で為されている。しかし、筆者は、今回調べた資料の中から（＝あれだけ几帳面に、東井は膨大な資料を保存しているにもかかわらず)、この「適格」の報を見出すことはできなかった。それと、この1946年10月7日という日付は、もう一つ、筆者の腑に落ちない。兵庫県で教員適格審査が開始されたのは、1946年8月19日。そして同年10月7日に、もし「適格」の通知があったとすれば、これは極めて順当な展開ではないか。東井本人が記している「他の人たちの審査が終わり、「適格」という判定が通知されてきても、私には音沙汰がなかった。当然のことであると思った。が、とうとう私にも「適格」の判定が通知されてきた。」と矛盾するではないか。公式に審査が終わるのが、翌年3月某日であることから考えても、前年10月7日の時点で「私にはまだ来ない」と東井がイライラ気をもむ必要はないのではないか。それにもし、宇治田が記した1946年10月7日が正しいのなら、翌年4月1日付の唐川小学校の人事がなぜ「教諭に補す」であるのか。教育委員会側も堂々と「教諭に命ず」とするのではないか。宇治田の10月7日を考慮に入れると、なぜ同一村内での人事で、一つは、4月1日付で教諭に補す、もう一方の4月30日付では教諭に命ず、とする齟齬をどう解釈すればよいのか。筆者には、納得がいかない。

とりあえず、上述の東井に対する「適格」通知は、98％以上の確率で1947年4月中旬頃であったと判断して間違いなかろう、とまとめておく。残り2％を詰める努力は、今後の課題とする。なお、木村元(2008)「東井義雄の戦中・敗戦経験とペダゴジー」も、先の宇治田論文に則って、「適格」の報を1946年10月7日と記していること、を付記しておく。

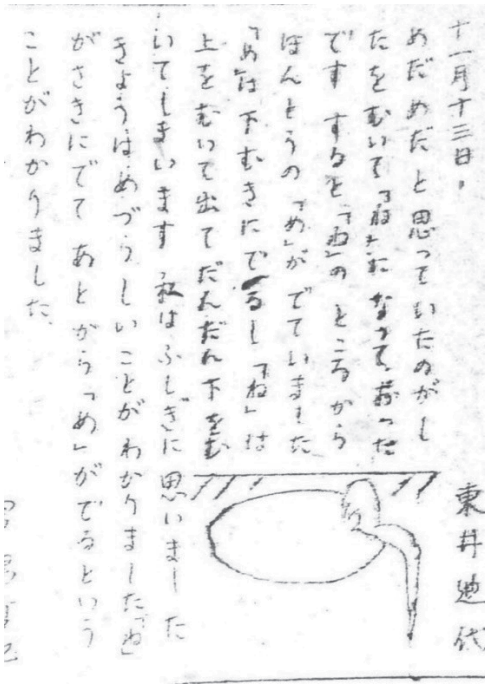
第２章　赴任初年度の相田小学校

4月30日付で相田小学校（教頭格で）教諭に命ぜられた東井は、6年生担任。彼は、5月9日子どもたちに着任の挨拶をする(唐川小学校から相田小学校への移籍のあわただしさが窺える。)。この子どもたちは、4年生の1学期は、終戦間際で勉強は午前中だけ、午後は山に入って炭焼き、あるいは運動場を耕しての食糧増産に駆り出されていた。戦争が終わり9月中旬から始まった2学期は、軍国主義や植民地に関するもの、または国家神道に関する教科書の記述に墨を塗る作業に追われる。5年生になっても、平和と民主主義を目指す新しい教科書はまだ十分に間にあわず、仮綴じ教科書での授業。6年生になって初めて、教育基本法と学校教育法に基づいて編成された新しい教科書で授業ができるようになる。

東井は、着任後2ヶ月程で、全校児童から選んだ綴方や日記、詩などを自分でガリ版印刷した『相田校こども新聞土生（はぶ）』を出し始める。7月19日に出された『土生2号』は、B4判ザラ紙5枚裏表に印刷。それが5号になると、裏表10枚と倍増し、内容も1年生「どんぐりこま・かんさつきろく」、2年生「りか・そらまめのきろく、日記、私の工夫」、3年生「共同作品・ほかけ舟、生活日記、手をつなぐつづり方、詩のある生活を築こう」、4年生「自由研究・茶わんの出来るまで、蛙の生活、でんわあそび、私たちの先生をおもう日記、私の家の祖先、分団別交通調べ」、5年生「読方教室、自由研究・毛糸の出来るまで、お米はどんなにしてとれるか、食物の大切なわけ、自由詩」、（東井担任の）6年生「私たちの国語教育・文のしらべ、小谷の歴史・京川城と沢田城・奥小谷のおじぞうさん・くちなが谷・奥小谷の新道・大川橋・湯谷の伝説（佐々木）・大崎神社・安国寺、楽しい家展覧会」と飛躍的に厚みを増す。2年生以上の子どもは、同時に複数の仕事に取り組んでいる。その中の2例、2年生「りか・そらまめのかんさつ」と6年生国語「『星の光』の読み味わい」を取り挙げておく。

この2年生「りか・そらまめのかんさつ」は、東井義雄記念館（館長・升田敏行）と「白もくれんの会（会長・衣川清喜）」が豊岡市教育委員会の後援を受けて2022年4月から始めた東井関係の新しい資料ダンボール10箱を分析・整理するプロジェクトチームに、筆者が顧問格で参画し、月一回のペースで作業する中で出会った「原史料」。

このそら豆の観察は、11月1日から始まる。11月4日になると、豆がふくれだしたことを確認。11月8日には、「かわをやぶってよいしょとめを出してくれた」と喜ぶ。11月10日には「かわをやぶってでてきためはきょうは2せんち5みりくらいになっていました。」と愛情込めて測っている理科的な観察の様子が窺える。そして、上に示した11月13日の感動的な観察記録で、


十一月十三日
めだめだと思っていたのがしたをむいて「ね」になっておったのです すると「ね」のところからほんとうの「め」がでていました。「め」は下むきにでるし「ね」は上を向いて出てだんだん下をむいてしまいます。私はふしぎだと思いました きょうはめづらしいことがわかりました「ね」がさきにでてあとから「め」がでるということがわかりました。
東井迪代

（「相田校こども新聞土生」第５号より）

> めだめだと思っていたのがしたをむいて「ね」になっておったのです。すると「ね」のところからほんとうの「め」がでていました。「め」は下むきにでるし「ね」は上を向いて出てだんだん下をむいてしまいます。私はふしぎだと思いました。きょうはめづらしいこがわかりました。「ね」がさきにでてあとから「め」がでるということがわかりました。

と書いている（下線—引用者）。

観察者は、最初に皮を破って出てきたものを芽ととらえ、それが上に向かって2センチ5ミリも伸びていくことをワクワクしながら観察する。ところが13日になると今まで芽だと思っていたものが下を向いて根になっていた。すると今度は根のところから本当の芽が出てきた。しかも下向きにである。「私は不思議だと思いました。今日は珍しいことが分かりました。根が先に出て後から芽がでるということが分かりました。」と、どんどん感動的な発見をしていく。根と芽を間違えたままで、8日から13日まで観察を続けさせ、そして「ありゃ、芽だと思っていたものが根であり、根が出た後で芽が出る」という不思議を感動的に子どもに気づかせるという「生活綴方的教育方法」=「概念づくりはゆっくりと」、がここから窺える。

ここで注目したいのは、観察日記が毎日みんなで分けあわれ・磨きあわれていく過程で、芽と根の「誤解」を学級全ての子どもたちが8日～13日まで共有しており、だからこそ13日の新しい発見もまた全員で感動的に共有される、という「集団を介しての学びあい」が体験されている、という事実である。8日～13日の間の観察日記は、3人の子どもたちの日記を、記事にするために東井が合成したもの。つまり、子どもたち全員に「誤解」を共有させ続ける指導＝性急に「正答」を指示しない教師の指導性は、東井が仕組む「生活綴方的教育法」と同質である。これだけの指導力がある教師が東井以外にいた、と判断して間違いなかろう。他の教師もほぼ同様の力量を持っていた、と筆者は推測したくなる。

東井は、もちろん、2年生の担任ではないし、1年～5年の子ども全てに授業をしているわけでもない。にもかかわらず、なぜ子どもたちはこれだけ質の高い作品をこんなに多く書けるのか。東井が着任する以前から、相田小学校では全校規模で「生活綴方教育」の風土が相当耕されていた、と推測したくなる。これは、筆者の暴論であろうか。そこに東井が着任して火をつけた、という解釈である。この状況をはじめから見通していたのが、校長野村勝治ではないか。野村は、豊岡尋常高等小学校時代からの東井実践を識っていたはず。古里合橋村内に戻ってきてからの合橋国民学校、唐川国民学校の実践については言うまでもない。敗戦直後唐川小学校で東井が編んだ文集『田んぼ道』（拙著『東井義雄の授業づくり—生活綴方的教育方法とESD—』、参照）を野村は手にしており、おそらく『学童の臣民感覚』も読んでいるはず、と筆者は推測している。とすれば、前章のような少々強引な導入人事に動いたことにも納得がいく。

根と芽を6日間も誤認したまま観察を続けさせる「生活綴方的教育法」=「概念づくりはゆっくりと」について、興味深い証言を付記しておきたい。それは、臼井嘉一（1945～2013）代表が2007～2009年にかけて実施した科研「戦後日本における教育実践の展開過程に関する総合的調査研究」の一つ田中武雄（2013）「兵庫・但馬の地域教育実践—東井義雄をひきつぐもの」である。その中で、田中は、『地域に根差す学校づくり』（国土社、1979）の著書がある兵庫県の森垣修が東井の自宅を訪ねて教えを乞うた時のエピソードを記している（149、下線—引用者）。

東井さんは、人にこうしなさいああしなさい、こうせよという結論を絶対に教えない。家まで行ったって教えない。自分で見つけなさいという。そういう勉強の仕方です。/僕ら授業を見ておったって教師が結論を言わないわけだから、子どもが気づくまで待つ。（中略）そこまで教師が待ちに待って教える。それを子どもが気がつくことをしなかったら子どものものにはならないって、東井の授業を見て分かった。

筆者が、これ以上解説を付け加える必要はなかろう。

もう一例は、6年生水上満の「国語読み味わい」ノートとそれに対する東井のコメント。これには、次のような「まえがき」が付いている（下線—引用者）。

「村の子ども（相田小学校—引用者）」は「町の子ども（豊岡尋常小学校—引用者）のように要領はよくなかった。しかし、私にはこの子どもたちが頼もしかった。「読み方」学習においても、子どもたちは敗戦の中に、身をもって立ち上がっていくような姿勢で、体ぜんたいをぶっつけて読むような読み方を「調べる読み方」の中で見せてくれた。それは、子どもたちをそういうように育てねばならない私が、逆に、子どもから「道ここにあり」と教えられ、励まされるような頼もしさに満ちたものであった（中略）終戦直後転任して行った学校（私の母校）での最初の子どもの読解記録である。

上記引用の下線から、東井本人も相田小学校の子どもたちは、「私がそういうように育てねばならない」つまり「道ここにありと教えられ、励まされる」程の力をすでに身につけていた、と感動的に語っている点も見逃すことはできない。

教材「星の光」は「学習指導要領（試案編）」に則って文部省が編纂した『国語　第六学年　中』(1947) にある2学期教材 (595)。{『東井義雄著作集　5』（81～83）では、縦書きで水上の言葉が上段、それに対応する東井の言葉が下段で示されているが、ここでは、＜　＞ゴチで教科書文、次に水上の言葉、そして［　］で東井の言葉を示し、適宜筆者が解説を加える。}

「星の光」の読み味わい　6年　水上　満

［水上は、学級では上の下というあたりの成績の子どもであった。］

＜あなたがたに、見てもらいたいものがあるのです＞

ここを読むと、だれかがそばで話してくれているような気になる。この文を書いた人は誰だろう。だれか、日本のことを、ひどく気をもんでいる。星に親しみがないことに気をもむというよりは、遠いもの、大きいものに心をくばることのない日本人のちっぽけな心をざんねんがっている。また、ぼくたち少年に、大へんのぞみをかけ、たよりにしていることが分かる。読んでいると、（中略）日本をいきかえらせるのは、ぼくたちのやく目だと思われてくる。

［水上は、早速問題設定をやっている。これができるようにならないと「意欲的な読み」は育たない。「読み」の主体である子どもが、ぐんぐん高まっていくような「読み」は育たない。/「読み」は「読み」のために大切にされねばならぬのではない。「読み」は、「読

み」の主体である「子ども」のために大切にしなければならぬのである。]

教師からの発問・指示を受けて、子どもが問題設定するのではない。子どもが主体的に自ら進んで問題設定していくところに、東井の指導法の特色がある。

＜星を見たって何になるという人があるかもしれません（中略）また、星とえんがないと思っている人があるかも（後略）＞

ここを読むと、星にたいしてぼんやりしているぼくたちを、ぐんぐんせめよせ、星を見てくれと一心にたのんでおられる心が感じられて、ぼくたちが星に力入れていないことがはずかしいような気になってくる。（中略）ここを読んでいると、ガリレオの話を思い出す。広大な宇宙が目にあらわれます。心が広々してきます。/先生、ぼくは、「星の光」の読み味わいがまだまだ足りないから、もう一どしらべなおします①。

[実際、ここの表現は、読者をぐんぐんせめよせていくような熱意と論理的構成をもっている。それを水上は受け止めているのだ。/水上は、思い出す読み方をやっている/文を読み深めることが、「読み」の主体を変えていくのだ。]

下線①から、ここでも教師の指示を待たずに、自ら読み込み不足に気づき、もう一度調べ直すと決心している。

＜見てもらいたいなどというと、どこかにしまってあるように聞こえるかもしれませんが（後略）＞

聞こえるかもしれませんの「聞こえる」ということばは、いかにも話しているようで、この人といっしょにいるようです。

[第一次の読みよりもこの「読み返し」の読みは、ぐんと、作者の心情に近づいたものになっている。親近感のあふれたものになっている②]

東井は、いわゆる「三読法」に基づいて指導していることが窺がわれる。

32頁をめくって読みはじめると、「さて」と、ちがったことばが使ってあります。どうしてでしょう。読んでいると、ここで、一歩話が前へ進んだような気がします③。

また、この人も、身がまえをなおして話されている感じがします。それはなぜでしょう。/ぼくは「星を見たって何になる」と思う人、「星とえんがない」と思う人のことを、この人が考えたから、それをやっつけるためだと思います。星をみることによって、農業が進歩した。こよみがつくられた。航海術が進んだ。数学が発達した。宗教も科学哲学も深まった。と、これでもか、これでもかとせめよせて、一人のこらず星を見させないではおかない、という意気ごみが感じられます。

[「さて」というような、ちょっとしたことばづかいにも敏感に反応しながら、水上はぐんぐん読み深めを進めていっている④。

そして、たえず、新しい問題を設定しては読み深めていっている。]

接続詞に気をつけて、というような概念的な指導ではなく、「さて」という言葉一つで文脈は変わることを子どもに気づかせ・発見させている。教師の方から教えな

いで、子どもに気づかせるという東井特有の指導法であることが分かる。

> 33ページのさしえをみると、ほんとうに、ふかい広大な宇宙にひきこまれそうな気がします。太陽だけでもびっくりするほどだのに、それは、銀河系の一部分にすぎず、銀河系がまた、大宇宙の一部だとは、おどろかされます。（後略）
>
> ［段落指導だとか文法指導だとか、国語教育の権威者ぶりを発揮して子どもをひきまわすが、子どもの大部分は、そういうことに、魅力も興味をも感じていない、というような授業を見ることがある。ところが「調べる読み方」では、子ども自身が、こんなに主体的に、進んでそういうものを問題にしているのである⑤。］（東井、1972b、81 ～ 83）

ここから、段落指導とか文法指導という形で教師が一方的に教えていくやり方では、子どもが興味を示さないことを周知している東井の鋭い指導観・子ども観が窺える。

引用した水上の「ひとりしらべ」ノートは、後に相田小学校で為される「稲むらの火」や「村をささえる橋」と遜色ないぐらいの質の高さをもっている＝上段に子どもの考え、下段に東井のコメントつけるというスタイルも同じ（豊田ひさき『東井義雄の授業づくり　生活綴方的教育方法とESD』、『東井義雄　子どものつまずきは教師のつまずき』参照）。東井が相田小学校に着任して、わずか5ヶ月足らずでここまでの授業ができた背景には、①この小学校に「生活綴方教育」の風土が既にある程度蓄積されていた。それは、先の引用「子どもたちは敗戦の中に、身をもって立ち上がっていくような姿勢で、体ぜんたいをぶっつけて読むような読み方を「しらべる読み方」の中で見せてくれた。それは、子どもたちをそういうように育てねばならない私が、逆に、子どもから「道ここにあり」と教えられ、励まされるような頼もしさに満ちたものであった」という東井の言葉からも明らかであろう。それともう一つ②東井がこのような授業を可能にするための確固とした指導手順を固め、それを子どもたちに提示していた、の2点があると考えられる。

まず②から検討していこう。東井の授業は、どの教科であれ、原則［1. ひとりしらべ―2. みんなでのわけあい・みがきあい―3. ひとりしらべ（学習）］の3段階の過程を踏まえて展開する。この展開法を、東井は既に24・5歳までの豊岡尋常高等小学校時代に確立している。先の水上のノートは、「1. ひとりしらべと3. ひとりしらべ（学習）」の部分。東井は、このノートを見て、［　］に表記したようなことを考えながら、「2. みんなでのわけあい・みがきあい」という授業の核心部分に入っていく。この核心部分が豊かに展開可能になるためには、授業前の「1. ひとりしらべ」でノートへの書き出しが重要。そのための足場＝「読み方の勉強の仕方」を提示する手順も、東井は、24・5歳までに固めて、子どもにプリント配布している。

「ひとりしらべ」の足場になるプリントの一部を挙げておく（東井、1962、78 ～ 79）。

> 1　文に向かったら、まずざっと文を読んでみよう。むずかしい漢字やことばはとばしてどんどん読んでみよう。
>
> （中略）

6　言葉の調べが終わったら、書いてある順番に、何が書いてあるのかを考えて読み、書いてあることがらを調べよう。その時、文の切れ目に注意し、一つの切れ目毎に、書いてある事柄をまとめるように工夫し努力しよう。そうやって調べていくと、いくつかの切れ目が、また一つのことがらにまとまってくるかもしれない。まとめることのできることがらは、なるべくまとめていくようにしよう。できたら、ぶんぜんたいのことがらを表にまとめてみるようにしよう。

7　書いてあることがらがわかっても、それですっかり文が読めたとはいえない。こんどは、ひとつひとつのことばをかみしめながら、文を味わって読もう。味わいが出てきたら、ノートに書きためて行こう。（後略）

8　ひととおり味わい終わったら、前に調べたことがらの調べを思い出し、全体として、作者は何を書きたかったのか。何を私たちにわかってもらいたかったのか、「作者の意図」を考えよう。

水上のノートが、これら1～8（実際は9まで）に則って作成されていることが分かる。彼は、東井に担任されて5ヶ月程でこの「しらべるノート」づくりを身につけている。東井は、子どもに勉強するための「足場」を与えた上で授業に臨んでいたのである。

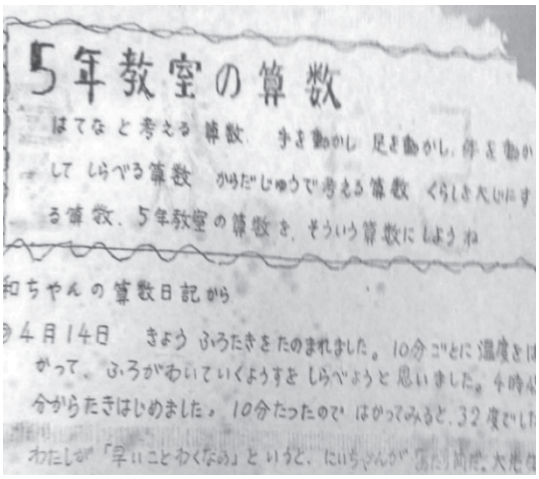
第３章　『土生が丘』の読み直し

前章①相田小学校には「生活綴方教育」の風土が蓄積されていた、という検討に移ろう。東井は、1947年5月に相田小学校に着任し、6年生の担任になった。彼らを卒業させた翌年は5年生の担任になり6年生へと持ち上がる。原則として、そしてまた翌年5年から6年へと持ち上がるというサイクルを、1959年同校長になるまで繰り返していく。時には、教科によって5・6年、あるいは4・5年を複式で担当することもあった。

筆者は、2022年7月、東井の新しい資料を分析・整理する仕事の中で、以下の「5年教室の算数」という「原資料」を見つけた。

この5年教室とは、何時か。東井の担任サイクルに当てはめれば、1952年度になる。

［5年教室の算数　はてなと考える算数……］という題字とその具体例、つまりこの日は「和ちゃんの算数日記から」という「ひとりしらべ」を題材にして、東井は「わけあい・みがきあい」の算数授業を展開していく。題字の「はてなと考える算数　手を動かし　足を動かし　体を動かしてしらべる算数　からだじゅうで考える算数　くらしを大じにする算数　5年教室の算数をそういう算数にしようね」は前章で見た


5年教室の算数
はてなと考える算数　手を動かし　足を動かし　体を動か
して　しらべる算数　からだじゅうで考える算数　くらしを大じにす
る算数　5年教室の算数を　そういう算数にしようね
和ちゃんの算数日記から
4月14日　きょう　ふろたきをたのまれました。10分ごとに温度をは
かって、ふろがわいていくようすを　しらべようと　思いました。4時
今からたきはじめました。10分たったので　はかってみると、32度でした
わたしが「早いことわくなあ」というと、にいちゃんが

（原資料）

国語の「足場 1 ～ 9」を手がかりにした「ひとりしらべ」と同じスタイルである。

この日記でもう一つ注目すべきは、「和ちゃんの日記から　4 月 14 日」という日付である。4 月 14 日は、東井がこの 5 年生の担任になり算数の授業を始めてまだ 10 日も経っていない―ひょっとすると前年度は算数は 4・5 の複式授業だったかもしれないが。それはともあれ、彼女は、以下に引用するような質の高い算数日記が書ける力を既に 4 年生の終わりまでにつけていた、と解釈して間違いなかろう。筆者が、相田小学校では東井が着任する以前から「生活綴方教育」の風土が相当耕されていた、と推定する理由がここにもある。

「和ちゃんの日記」（東井、1972a、143 ～ 144）

ふろたきの算数　　5 年　福田　和子

きょう、ふろたきをたのまれました。ふろがわいていく時間や温度をしらべながらふろたきをしようと思いました。/ ちょうど、4 時 10 分からたきはじめました。とけいを見ていると、10 分たったので、温度をはかってみると、32 度（華氏―引用者）でした。わたしが、/「はやいこと、わくなあ」/ というと、兄ちゃんが、/「あたり前だ、大先生がたいとんなるもん」/ と、じまんしました。/ その中、5 時 10 分になったので、温度をはかってみると、49 度でした。わたしは、おとついふろをたいた時、おばあちゃんが、/「46 度ほどになると、もうわいている」/ と、いわれたのを思い出しました。46 度より 3 度温度が高くなっています。/ けれども、ふろが早くわくように、水が、ふろ釜に 4 分の 1 しかはってありません。それで、これに水を入れたら、（後略）

校長が野村勝治から田口利三に代わり、さらに 1954 年 4 月に赴任した臼田弘蔵校長は、「子どものしあわせは、親・子・教師の磨きあいと育ちあいの中で築かれる。（中略）学校通信みたいものができんかなあ」と呟く。それを受けて、東井が「やらせてもらいましょう」と編集長を引き受け、同年 7 月、学校文集『土生が丘』が創刊される―相田小学校に着任した年『相田校こども新聞土生』を出していた東井にすれば、「待ってました !」という当然の反応といえる。『土生が丘』の分析は、菅原稔の『戦後作文・綴り方教育の研究』（2004）と「東井義雄先生の教育実践と学校文集『土生が丘』―その意義と価値―」（2001）が最も詳しい。木村元（2008）「東井義雄の戦中・敗戦経験とペダゴジー」も、戦前との関わりも含めて、俯瞰的に『土生が丘』の分析を行っている。菅原は、この 2 典何れでも、「『土生が丘』は 1954 年 7 月～ 1960 年 6 月までの通巻 60 号で、同年 6 月で刊行を停止した。それは、東井が学校長になって公務が忙しくなったため」としている。木村の上記論文も先の菅原論文に則っているため、『土生が丘』は通巻 60 を踏襲している。

しかし、筆者は、2022 年 8 月東井の新しい資料を整理する中で、1961 年 3 月 24 日に『土生が丘』第 66 号が卒業記念号として刊行されていることを確認した。『土生が丘』は、1961 年 3 月の通巻 66 号まで刊行されていたのである。この『土生が丘』は、「子どもが通学しているか否かに関わ

りなく村内143戸全戸に配られた。それに対する村民の反応は、30号発行の時の調べで実人員139人が1回以上は投稿してくれている。その後毎号新人の投稿があるから執筆者実数は150名を突破していると思う。」と東井は「『土生が丘』その誕生と成長」（東井、2001、9）の付記で述べている。

最後に、『村を育てる学力』出版の経緯を探る観点から、『土生が丘』を読み直していく中で見えてきたものを列挙しておこう。

1．第1号から、「母と子のページ」に1年生の子どものおしゃべりを担任が速記した詩が2点、「あるお母さんの詩」という母の詩1点、これに対する東井の「ほかのおかあさん方もどしどし作品をおよせください。人生の味をわけ合って味わおうではありませんか」という呼びかけがある。

2．相田小学校に幼稚園が付設されると、8月の第2号に早速幼稚園「沢田先生のノートから」という記事が載る。第3号には、「あるお母さんの詩」として、

> 本年の教科書を注文する日 / 子どもが / おかあちゃん / ぼくがことし使った本 / ××ちゃんにかしたげるぞ / といった。/ 大人は自分の子どものことだけしか考えないのに / 子どもは友だちの幸せのことまで考えていると思うと / はずかしいやら、うれしいやらの思いがこみあげてきた / かしてあげてくれいや / そしたら / 本のいのちも / 倍になって働くことになる（後略）

が載る（この詩については再度触れる）。「校区の歩み」として校区婦人会で西村鉄治（全但校長会長）を招いての講演会や「三つの歌」大会、校区青年団の研修・文化活動などが載る。学校以外の娯楽記事にも注目したい。

3．1954年10月の第4号になると、8月に校区婦人会の講演に来た西村鉄治校長が、（東井が1952年度に受け持った5年生の）子どもたちの文や詩をもとに「生土ふんで」という和綴じ本（私家本）を作り卒業生に1冊ずつ届けてくださり、県下にも広く紹介してくださった。今度また新しく「相田の子どもたち」という和綴じ本（私家本）を作り、5・6年の子どもでも読めるやさしい文章で各方面に紹介してくださいました（中略）という（東井の）謝意。この時西村は、朝来郡和田山町（現、朝来市和田山町）牧田小学校長。（教育委員会）出張所の課長や主事からの御礼と励ましが載る。

4．第6号には、音の詩　川と題する以下の詩が載る。

> 川　　5年　保田　朗
> さら　さるる
> ぴる
> ぽる
> どぶる
> ぽん　ぽちゃ
> 川はいろいろなことおしゃべりしながら
> 流れていく（後略）

これは東井にしかできないことである。文部省唱歌「春の小川」のように川は「さらさら」流れるのであって、上のように聞こえるはずがない、と東井は切り捨てない。聴き方、感じ方は、人それぞれ異なる。だから、この詩を授業では「みんなで分けあい・磨きあう」必要があるのだ、というのが東井特有の授業法である。

なお、この詩に関して、後に保田自身は

次のように書いている。「川の詩は、(中略)昭和38年の6年生の国語の教科書に掲載され、当時の文部省の検定に出されましたが『川の音はさらさらで良い、これは擬音であり穏当ではない』と削除が命じられたものです。」(白もくれんの会『東井義雄　生誕100年追悼文集』123)。

この詩に関して、もう一つ追記しておきたいことがある。それは、この川の詩が載せられた6号の前号に「音の詩集」という特集が組まれ、そこに4年福田澄子の水車の詩が載せられている。この詩を読んで、それじゃ僕もと保田が次号に川の詩を書いた、という経緯である。これが、東井特有の指導法だ、と筆者は考えている。前章で触れた森垣修が東井の自宅まで押しかけて教えを乞うても、「自分で気づきなさい、それまで教師は待つのだ」と東井は絶対に教えてくれない、というエピソードと同じである。また、東井はこの川の詩がとりわけ気に入ったらしく、西村の自家本『相田の子どもたち』の裏表紙の裏に、全部メモしている。西村の私家本が東井に送られたのがこの川の詩の前、つまり9月であったことも確認できる。

5．第13号には、雑誌『教育』編集部の北畑耕也が『土生が丘』送付の礼状として、校長の面白いエッセイと第11号の子どもの「いそがしい父」がこまかい観察を簡潔な文でよく表していて感心した、という記事が載る。これは、東井の長男義臣の作品である。その一部を紹介すると、

> 父は学校のつとめのほか、1週間に何べんかはきっと出かけていく。(中略)夜出かけていくこともある。だから父の帰りを知らない晩がいく晩もある。でもぼくらが朝おきてみると帰ってきている。(中略)日曜にもほとんどいたことがない。(中略)きげんのよい時はやさしいが、父は、きげんの悪いことが多い。よくおこったようなもの言いをする。すこしいそがしすぎるのだろう。あまりおこったようにいわれると、ぼくはむっとすることがあるが、いそがしい父のことを考えて、がまんするようにしている。それから父にはすこしほうけん的なところがありすぎると思う。ふろの火を見たり、すいじをしたりするようなことは少しもしない。いくら大しょうでも、たまにはした方がよいと思う。いつか、家ぞく会議をひらいて、ぼくは一ぺんこのことを話そうと思っている。

東井の家庭での様子が窺えて面白いと同時に、彼の活動振りがよく分かる。「1週間に何べんかはきっと出かけていく、夜出かけていくこともある。日曜にもほとんどいたことがない」というこの忙しさの中身は、教員や学校を相手にする講演・指導だけではなく、部落単位で開かれる夜の小さな集まり(昼は農作業に忙しいから)にも、彼が自分も一人の村民として顔を出し、先生面や住職面をしないでみんなと同じ目線で談笑している姿である。ここにも生活綴方教師東井の教育観・人間観が窺える。

6．1956年3月の第20号には、西村鉄治先生「相田のおかあさんたち」を出版という題で、相田教育を天下に紹介したいと、これまで、作文集「生土ふんで」を再版してくださったり、「相田のこどもたち」をつくってくださった西村先生は、こんどは「相田のおかあさんたち」を著してくださ

いました。まだお読みにならないかたはぜひ読んでください（申し込みは学校へ　頒価五十円）という記事が載る。さらにその西村鉄治の次のようなお願い文が載る。

（西村鉄治が）「東井先生に『相田教育』のいとなみを書いていただきたい（中略）『山びこ学校』の無着氏や今度映画にもなるという小西健二郎氏の『学級革命』に優るすばらしいものが書けるはずと思うのです。しかも、それら以上に、日本の教育進展に役立つと考えるのです。

7．1956年7月の第24号には、「村を捨てる学力と村を育てる学力」という東井の小論が載る。『村を育てる学力』を出版する自覚が彼に確立した証拠、といえよう。

『村を育てる学力』の出版が1957年5月、その前年のこの西村発言と1954年第4号にある西村の和綴じ本『生土ふんで』、『相田の子どもたち』の配布記事は注目に値する。『村を育てる学力』出版の裏に、西村鉄治がいたことが分かるからである。

筆者は、2014年3月初めて東井義雄記念館を訪ずれたが、その時の館長が衣川清喜氏。それ以来、毎年記念館を訪れる筆者の世話をして下さっている。衣川氏は、東井の教え子で、現在「白もくれんの会」会長。本年、新しく出てきた東井関係の資料を一緒に整理・分類作業をしている際に、この西村鉄治とはいかなる人か、なぜこんなに東井に肩入れするのか？　とざっくばらんに尋ねたところ、西村は戦前県視学で、その当時から東井に目をかけていた。その関係で東井は戦後も西村に指導を仰いでいた、と教えて下さった。なお、宇治田（2001、425）も西村が『村を育てる学力』出版の裏方であったと指摘している。

そして、もう一人、佐古田好一（1908～1999）の存在も忘れてはならない。『村を育てる学力』の「あとがき」には以下の言葉がある。

『学童の臣民感覚』で、ものを書くということが、どんなに責任のある事かということを、思い知らされた私である。（中略）その私に、書くことを進めてくださったばかりか、どんどんその手順を運んでくださったのは①、京都府指導主事佐古田好一先生であった。ちょうど十年、私を勤めさせてくれたその「つっぱり学校」の、ひょろひょろ教師の私にも、「つっかい棒」が必要のようだ。「先生が、つっかい棒になってくださるなら、書いてみましょう」/そんなことで書きはじめたのだが、（中略）遅々として筆は進まない。期日は来てしまう。佐古田先生は指導主事に出てしまいなさる②。先生の方にも、「つっかい棒」になってくださる余裕がなくなってしまった。

佐古田が、明治図書との間でどんどん出版段取りをつけていった時期、つまり下線①の時期は、指導主事に出る下線②以前ということになる。それは、何時か。佐古田が京都府加佐郡大江町（現福知山市）河守小学校で校長をしていた時である。河守小学校は、廃校・統合を繰り返し、2021年4月から小中一貫の福知山市立大江小・中学校＝愛称大江学園となっている。当時彼は、福知山市と大江町を含めた「福天作文の会」初代会長。河守小学校長時代の佐古田編

(1955)『親と教師をむすぶもの』(199) には、前任校有路小学校長時代に彼の発案で刊行された母の作文集『桑の実のおかあさん』に「私たち母親を教育して頂くよりも前に、家の年よりの人たちにもっとわかってもらってほしいのです。一生懸命（作文を―引用者）書こうとしても、舅や姑のある人たちには、なかなかむずかしい問題がたくさんあります」という苦情の手紙が寄せられた、と記されている。農村の老人は頑固で封建的で困る、これが学校教育の壁になっていると嘆くだけではなく、教師の方から進んで部落へ入り、同じ村民の一人として老人とも談笑を交わすという形で当時有路小学校では親・地域との連携を模索していた。全学級の担任が毎日子どもの日記を読み、学級文集や学校文集「桑の実」を編んで家庭への回覧を行っていた。佐古田のこのスタンス＝「生活綴方的教育方法」は、河守小学校長に転任してからも変わらない。大江町内の現職小中学校の教育実践だけで編んだ佐古田好一編（1960)『父母と教師をむすぶもの』が、その証である。佐古田の有路小学校における子ども・親・地域の実態把握を土台とした学校づくりについては、最近、富樫千紘（2022)「佐古田好一の学校づくり実践における『子ども理解』の位置づけ」が、詳しい分析を行っている。

翻って考えてみると相田小学校のある豊岡市但東町と大江町は県境を挟んで隣同士。校区は共に山間の農村地帯。少々荒っぽいが直線距離で測ってみると、相田小学校から河守小学校までと相田小学校から豊岡市中心部にある県立文教府まではほぼ同じである。佐古田も東井も「日本作文の会」会員で東井は「出石作文の会」の実質的リーダー。戦前からの生活綴方教師である二人が互いの文集を交換し合うことは、大いにありうると考えてほぼ間違いなかろう。有路小学校は、相田小学校より少し前から学校文集を出して、学校・子ども・家庭の連携に努めていた。河守小学校長に転任し佐古田は、そこで『親と教師をむすぶもの』を出版している。そこへ相田小学校から『土生が丘』が送られてきて、「これは願ってもない同志だ!」と膝を打ったのが佐古田ではなかったか。頼もしい同志と信頼したがゆえに、明治図書からの出版手順をどんどん進めていった、というのが筆者の推測。

ダンボールに保管されていた未整理の書簡類から、2022 年 10 月、筆者が確認できた明治図書との出版段取りを追ってみると、佐古田が『土生が丘』に感激して、明治図書からぜひ出版をと勧めた書簡は、河守小学校校長名で出されている。その日付は、1956 年 2 月 17 日が最初。それからちょうど 1 か月後の同年 3 月 17 日付の書簡で、佐古田は、後は明治図書の木田尚武編集長との間で詰めてほしいと記している。先の「私に、書くことを進めてくださったばかりか、どんどんその手順を運んでくださった」時期とは、この 1956 年 2 月 17 日からちょうど 1 か月後の同年 3 月 17 日の間である。最終的に、東井は、同年 6 月一杯で初稿を終了し 9 月初旬出版という段取りを約束している。ところが、「原稿は遅々として進まず、佐古田は京都府指導主事となり、結局 1957 年 5 月まで出版が遅れることになった」、という経過が書簡を介しても確認できた。

第４章　二人の接点

東井と佐古田の接点は何か、もう少し詰めてみよう。前章で触れた『土生が丘』第3号の「お母さんの歌」、つまり「ぼくがことし使った本 / ××ちゃんにかしたげるぞ（後略）」に関わって、東井は『村を育てる学力』（13）で次のように記す。

> 私はこれを見てうれしくなってしまった。一人の喜びがみんなの喜びとなり、一人の悲しみがみんなの悲しみになっていくような、つながり生きる世の中に、それを志向するような子どもを念じるわれわれ教師の営みが、こうして、子どもから親に、親から家に、家から村に、池の波紋のようにひろがるのだと思うと、私のせまい胸もふくらむようで、うれしさに一瞬酔ったほどだった。/ その日、母親に出あったので「ありがとう」と礼を言ったのだが、その時母親から聞いたことばは、私という人間の甘っちょろさを痛いほど思いしらせてくれた。/K の母親は「負うた子に教えられた」、と喜んでこの詩を書いたのだが、この詩には、書かれざる涙の後半があったのだ。/ つまり K は、母の同意を得たので、すでに不要になっている教科書を、N の家へ持って行こうとしたのだ。するとその時、／「うちのぜにで買うた本、人に貸さんでもええ」／年は寄っても、まだ一家の経済を支配している「おじいさん」の鶴の一声だったのだ。母と子が直面せねばならなかったのは、手をつなぐことのしあわせの築き方を知らない村の年寄り（中略）若い女や子どもの力ではどうにもならない頑固な封建制とのからみあった壁だったのだ。そして、これこそ、学校教育の壁でもあるのだ。

この壁はどうしようもないと、あきらめるのではなく、教師の方から部落へ出向き、老人たちとも同じ目線で談笑しながら、教師である私も同じ村民なのだ、お互いに手をつなぎあい・磨きあいましょうという間柄になることを願っていたのが、相田小学校の教師たちであった。これは、佐古田と同じではないか。

これほどまでに、東井らが部落の人々と手をつなぎあい・磨きあう状況を創り出すことにこだわった理由は何か。この点について長妻三佐雄は「東井義雄における『善意の哲学』—地域社会と生活実態—」（2021.14）で、それは眼前の子どもに向き合う現場教師に徹しようとしたからではないか、と次のように指摘している。

> 現実の教育実践では、理想論ではなく、与えられた条件の中で、いかに「村を育てる学力」を養成するか、小さな創意工夫を積み重ねていく必要があり、東井はその先覚者であった。

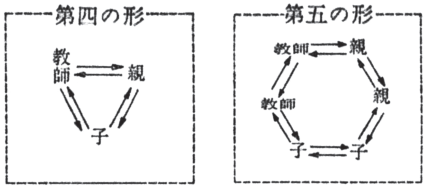
長妻のこの指摘に、現場の教育実践者と協働する姿勢で長年授業研究・授業づくりを続けてきた筆者は、賛同する。

『村を育てる学力』第一章で、東井は、親・子・教師が味方同士であるとすると、この三者は、どんな形で手をつなげばいいのだろうか。この三者の手のつなぎ方には、一体、どんな形がありうるのだろうか、と問

題提起し、次のような第一図～五図で説明している。ちなみに、この第一～第五図までの図を挙げての説明は、『土生が丘』1956年10月の第37号でなされている―先述の東井と木田の約束で『村を育てる学力』の出版予定が、9月初旬であることから確実に遅れていることが分かる。

第四・五図については次のよう。

> 第4の形は、親と教師が、互いに尊敬しあい、磨きあうばかりでなく、子どもとの間にも尊敬と磨きあいを展開していく形である。/だが、この形も、私たちが念じなければならぬ最後の形ではない。第四の形は、当然、第五の形にまで育て上げられねばならぬ。第五の形は、親・子・教師が、単数のままで、尊敬と磨きあいをしていくのではなく、一人一人が大じにされる形を残しながら、しかも、親が親たちとなり、子どもが子どもたちとなり、教師が教師たちとなって、その輪を広げていく形である。/村の人たちは、そうでなくても、一人一人が一人の城にたてこもろうとする傾向を強くもっている。そして、それが当たり前のことだと信じている。「うちのぜにで買うた本、よその子どもに貸さんでもええ」というようなことばも、そういうところから生まれてくるのだ。また、子どものけんかに親が出て、親と親とがいがみあっているというような風景が多いのも村だ。/村にしあわせをうちたてるための要件はいろいろあるが、村に、好もしい人間関係をうちたてるということは、その要件の中の大じな一つだ。/そういう意味で、私たちは、ぜひこの第五の形を育て上げねばならない。/教師が、村の子供たちや親たちの本当の味方になる、ということは、実践的には、村に、この第五の形をうちたてることだといえよう。



（『村を育てる学力』29より）

この第五の形を目指す東井の教育実践は、先の佐古田好一とぴったりと重なる。ここに、佐古田が東井を信頼できる同志と受け止め、明治図書からの出版の段取りをどんどん進めていった根拠が窺える。

もう一つ急いで付け加えておきたいことがある。この第五の形は、1956年『土生が丘』第27号で論じられている。つまり、前号で編集長東井が「私たちの住む土地について認識を深める記事として、歴史で神社、寺、お堂、山、谷、伝説などの寄稿」を親に願い出る。この願いに親たちが早速『土生が丘』27号で応える。「6年の時の文」と断り書きして、「京川城と沢田城、奥小谷のおじぞうさん、くちなが谷、湯谷の伝説（佐々木）、安国寺」の原稿が寄稿されている。親たちの6年の時とは、第2章で考察した東井が相田小学校に赴任した1947年に編んだ『土生5号』の6年生の綴方である。2022年に筆者が新しく出てきた東井関係の資料を分析・整理していて驚いたのは、東井の自分に関わるモノ―たとえば

尋常小学校の時の成績や、賞状まで―の保管の几帳面さである。教え子たちも、9年ほど前に書いた綴方を大人になっても大事に保管している。よほど、東井の教育がすばらしいものとして子どもたちに刻印されていた一つの証拠、と筆者は考えている。

さらに、本考察では、次の副次的成果があった。この第五の形を目指す東井の教育実践は、「内発的発展」論の教育実践であり、筆者が本誌前号で取り上げた「土田茂範の生活綴方教育実践史―醍醐小学校での実践を中心にして―」と通底していることが明らかになった。

最後にもう一つ、明治図書の編集長木田がどれだけ東井実践に感動していたかということを挙げておこう。「教師の仕事　1」として1957年5月に単著『村を育てる学力』、同年9月に「教師の仕事　2」として野名龍二・戸田唯巳・熊沢文男・土田茂範との共著『学力を伸ばす論理』、同年10月に「教師の仕事　3」として寒川道夫・佐古田好一との共著『子どもを伸ばす生活綴り方』を出し、翌1958年5月には「教師の仕事　7」として単著『学習のつまずきと学力』と、東井が立て続けに出版していることからも分かろう。木田は、『村を育てる学力』を「教師の仕事　1」とし、このシリーズを東井中心に企画したものと考えて間違いなかろう。その延長線上で、木田は1972年から東井義雄著作集全7巻と別巻3巻の責任編集者も務めている。

おわりに

最後に、本考察で明らかになったことを箇条書き的にまとめておく。

1．東井義雄は、敗戦後なされた教員適格審査で、1947年4月中旬に「適格」の最終判定が下されたため、相田小学校教諭としての人事発令が、同年4月30日付にずれたと推定してほぼ間違いなかろう。明確に断定しなかったのは、東井への「適格」通知は1946年10月7日という宇治田の指摘を否定する物証を見つけ出せていないからである。これは、筆者の今後の課題としたい。

2．『村を育てる学力』出版の裏には、戦前兵庫県視学で敗戦後但馬各地の小学校長をしていた西村鉄治がいた。敗戦後も東井が師と仰ぐ西村は、東井が集めた子どもの綴方や詩を基に和綴じの私家本を作り、各地に配って宣伝し、これらをまとめて「相田教育」に関する本を東井に書いてほしいと願っていた。もう一人は、1946年から京都府大江町諸校の小学校長を勤め、学校と地域の連携に取り組んでいた佐古田好一。佐古田は、『土生が丘』にこれぞ同志と感激し、東井に出版を勧め、自ら明治図書に「わたり」をつける。

3．今まで『土生が丘』は、1954年7月～1960年6月までの通巻60号とされていた。筆者は、2022年、新たな東井関係の資料を整理中、卒業記念号として1961年3月の66号まで発行されていることを確認した。

4．土田茂範との関係でいえば、土田の後見役は須藤克三。彼は、和綴じ私家本『百姓のうた』で、土田が本を出せば、それは無着の『山びこ学校』に優るものになる、と期待をかけていた。東井の後見役西村鉄治も、和綴じ私家本で東井の本は、『山びこ学校』に優るすばらしいものに

なるはず、と期待していた。そして、東井と土田の二人は、1960年代以降さらに多数の論文、著書刊行を実現し、確実に無着を超える生活綴方的授業実践を深化させた。もう一つの共通点は、土田、東井二人とも「内発的発展」論に基づいた村の生活綴方教育実践家であった、ということが確認できた。

（本稿は、科研基盤研究（C）「日本の戦後初期授業実践における「表現」に関する基礎的研究」の中間報告（2）である。）

［註］

岩佐礼子（2015）『地域力の再発見—内発的発展論からの教育再考—』、藤原書店。

宇治田透玄（1998）「情熱の教育者　東井義雄」（『但馬人物ものがたり』企画委員会編『『但馬人物ものがたり』但馬文化協会）。

宇治田透玄（2001）「『土生が丘』前後の歩み」（「白もくれんの会」編『東井義雄教育の原点「土生が丘」復刻版』）。

臼井嘉一（2013）『戦後日本の教育実践—戦後教育史像の再構築をめざして—』、三恵社。

木村元（2008）「東井義雄の戦中・敗戦経験とペダゴジー」（三谷江孝『戦争と民衆—戦争体験を問い直す』、旬報社）。

『国語教育史資料　第二巻』東京法令出版、1981。

『戦後日本教育史料集成　第一巻』三一書房、1982。

佐古田好一編（1955）『親と教師をむすぶもの』、新評論社。

佐古田好一（1960）『父母と教師をむすぶもの』、新評論。

東井義雄（1962）『国語授業の探求』、明治図書。

東井義雄（1972a）『東井義雄著作集　1』、明治図書。

東井義雄（1972b）『東井義雄著作集　5』、明治図書。

東井義雄（2001）「学校通信『土生が丘』その誕生と成長」（「白もくれんの会」編『東井義雄教育の原点「土生が丘」復刻版』）。

富樫千紘（2022）「佐古田好一の学校づくり実践における『子ども理解』の位置づけ」（和光大学現代人間学部紀要15巻）。

豊田ひさき（2016）『東井義雄の授業づくり—生活綴方的教育方法とESD—』、風媒社。

豊田ひさき（2018）『東井義雄　子どものつまずきは教師のつまずき』、風媒社。

豊田ひさき（2022）「土田茂範の生活綴方教育実践史——醍醐小学校での実践を中心に——」（『朝日大学教職課程センター研究報告』第24号）。

長妻三佐雄（2021）「東井義雄における『善意の哲学』—地域社会と生活実態—」（『大阪商業大学論集』第200号人文・自然・社会編）。

西村鉄治編『相田の子どもたち』（私家本、1954）。

白もくれんの会（2013）『東井義雄 生誕100年追悼文集』。

兵庫県教育史編集委員会（1963）『兵庫県教育』。